

肥厚の改善が認められ、効果ありと判定した。経過を追って効果が増すと報告があり、本2例も今後効果を期待したい。また更に症例を加えて、治療の開始時期、使用する放射線およびステロイドの量などを検討していきたいと思う。

2) Penderd 症候群の1姉妹例

羽入 修・中川 理
山崎 雅俊・谷 長行
伊藤 正毅・柴田 昭 (新潟大学第一内科)
漆山 勝 (佐渡総合病院内科)

Pendred 症候群は先天性感音性難聴と先天性ヨード有機化障害に基づく甲状腺腫を合併する症候群で、1896年 Pendred が初めて報告して以来数々の報告がなされている。症例は17歳と15歳の姉妹で2人とも幼児期より感音性難聴を認めている。両親は血族結婚ではない。今年に入り妹の甲状腺腫が急速に腫大したため精査目的に当科入院となった。Perchlorate 試験陽性でヨード有機化障害を認め Pendred 症候群と診断した。甲状腺機能、TRH 試験とも正常で、甲状腺腫の縮小効果を期待して T₄ 製剤投与中である。今回 Pendred 症候群の姉妹例を経験したので、若干の遺伝学的考察を加えて報告する。

3) 身体的特徴のない成人型偽性副甲状腺機能低下症Ⅱ型の1例

太田 大介・筒井 一哉 (県立がんセンター)
佐藤 幸示・原山 尋実 (新潟病院内科)
神経内科

身体的特徴を伴わない偽性副甲状腺機能低下症Ⅱ型の症例を経験したので報告する。

症例は34歳女性。31歳頃より時々、四肢、顔面のしびれや振戦を自覚するようになり特に冬季に多く認められた。その後も同様の症状が続き、これらの症状を主訴として当科も受診した。当科受診時、低 Ca 血症にもかかわらず血中副甲状腺ホルモン高値であったため、偽性副甲状腺機能亢進症を疑い Ellsworth-Howard 試験を施行した。その結果、尿中 cAMP 反応陽性、尿中 P 反応陰性であった。また、腎原性 cAMP 3.89 nmol/dl と高値であった。身体的特徴をともしなわなくとも正確に施行された Ellsworth-Howard 試験がその条件を満たせば診断して良いことになっており、本例は偽性副甲状腺機能低下症Ⅱ型と診断した。

4) 健常男性における L-arginine 負荷にたいする血清 Ca²⁺ 依存性一酸化窒素合成酵素の反応

山崎 雅俊・伊藤 正毅
他・内分泌代謝班一同 (新潟大学第一内科)

【目的】最近我々は、各種疾患や病態への関与が示唆されている一酸化窒素 (NO) を生体内で生成する Ca²⁺ 依存性一酸化窒素合成酵素 (NOS) の peptidebased radioimmunoassay (RIA) を開発し、人血中にかかる酸素の免疫活性が存在することを明らかにした。そこで、NO の合成前駆体である L-arginine 負荷にたいする血中 Ca²⁺ 依存性 NOS 免疫活性の濃度変化を検討した。【方法】健常男性9名に対して体重 1kg 当り 0.5g の内分泌検査用 L-arginine を30分間静脈点滴し、負荷前、負荷後30、60、120、180分に静脈採血し、血清を開発した RIA 用検体に供した。【結果】全例の比較では、負荷前の NOS 免疫活性の値 (mean±SE) は 148.8±7.89 μg/L であるのに対して、180分後の値は 149.5±10.3 μg/L であり、有意な変化は認められなかったが、個々の比較では、負荷により有意に上昇する群と低下する群が存在することが判明した。【総括】現時点で L-arginine 負荷に対する反応に相違が健常者間に認められることが臨床的に意義があるか不明であるが、興味ある観察と思われた。

5) 食塩負荷による食後過血糖の増強 —胃排出能からみた検討—

中村 宏志・他
内分泌班 (新潟大学第一内科)

【目的】最近、炭水化物の摂取による食後過血糖が食塩の同時摂取により増強されるという報告がなされているが、その機序は明らかになっていない。今回、我々は、食塩の摂取が胃排出能に影響を及ぼすかどうかについて検討した。【対象および方法】対象は、健常人7名。早朝空腹時に流動試験食 300 ml を飲用させ、超音波法により胃排出時間を求めた。また、試験食摂取前と摂取後30分、60分、90分、120分、180分の血糖値、IRI、ガストリン、モチリンも測定した。さらに別の日に、食塩 5g を加えた試験食を用いて同じ検査を施行した。【結果】食塩添加食の方が、食塩非添加食に比して、負荷30～120分後において、血糖値の増加量が有意に高値であった。食塩添加食が食塩非添加食に比して、有意に胃排出時間 (半減期) が短縮していた。ガストリン、モチリンの負荷前後での変化では、両者とも、食塩添加食と食塩

非添加食の間に有意差を認めなかった。【結論】食後過血糖が食塩の同時摂取により増強されるのは、胃排出時間短縮による糖質の吸収促進のためであることが判明した。

6) 多発性肺塞栓症を合併した糖尿病性昏睡の1例

星山 真理 (柏崎中央病院内科)

症例は62歳の農家の主婦。1992年3月中旬、感冒に罹患後、胸内苦悶、悪心、嘔吐、心窩部痛を主訴として救急入院。入院時意識障害、過呼吸、高血糖 676 mg/dl、尿ケトン体強陽性を認め、糖尿病性ケトアシドーシス(DKA)として、インスリン持続注入が開始された。第6病日には低酸素血症(PO₂ 50 mmHg)以外すべて正常化した。10月中旬の現在も低酸素血症が続くため、原因検索が成された。胸部レ線では、hyperlucencyを呈すが肺気腫の所見は認められず、呼吸機能も正常である。心エコー所見でも異常なし。肺血流シンチでは多発性肺塞栓症の所見を認めた。

本例では、入院時すでに糖尿病性網膜症(SDR-II°)神経症、腎症を有しており、長期にわたるDMの放置は、組織 hypoxia を持続させ、microangiopathyを進めたと思われる。さらにDKAに伴ったacidosisと血圧低下は、ARDS初期病変を肺に生じせしめ、肺血管系変化とも相まって、肺塞栓症をもたらし、低酸素血症が遷延する一因となっていると推察された。

7) 糖尿病に併発したクッシング症候群の1例

荒川 道・八幡 和明 (厚生連中央総合病院内科)
大野 康彦・杉山 一教 (病院内科)

症例；53才男性。主訴：左足蜂窩織炎、背部痛。家族歴；母、糖尿病、現病歴；84年尿糖陽性。86年から血糖降下剤服用。88年より血圧上昇。91年10月下腿の浮腫出現。徐々にコントロール不良。92年2月筋力低下、点状出血あり。4月左足蜂窩織炎出現し整形入院するも難治。胸部 X-p で多発肋骨骨折、腹部 CT で右副腎腫瘍を発見。5月20日当科入院。現症；血圧 168/98、満月様顔貌、皮膚萎縮、点状出血、K 2.73 mEq、デキサメサゾン抑制テストで抑制されず。副腎シンチで右副腎に取り込みを認める。クッシング症候群の診断で7月16日右副腎腺腫摘除術施行。術後ステロイド補充開始。2週間後より高血圧軽減、糖尿病改善傾向にあり、左足蜂窩織炎は急速に治癒した。しかし尿中 C-peptide は依然低く、インスリン療法を必要としており糖尿病に併発した

クッシング症候群と思われた。

8) 両側性副腎腺腫による原発性アルドステロン症(P.A)の1例

金子 兼三 (長岡赤十字病院 内科)
森下 英一・中嶋 祐一 (同 泌尿器科)
須藤 寛人・山田 潔 (同 産婦人科)
佐藤 宏 (県立小出病院 脳外科)

症例は50才、女性。35才妊娠中より高血圧持続し治療されていたが、'92.2頃より高血圧高度(180~220/110~120)となり、低K血症(3.0 mEq/L)も発見され、'92.5紹介入院。高 PAC 血症(389 pg/ml、日内リズム有)、フロセミド・立位試験で PRA 低値・無反応、尿 17-OHCS、17-KS 正常より P.A の診断確定。Dexa 抑制副腎シンチで両側集積像が認められ、下大静脈、腎・副腎静脈血中 PAC 値に有意の左右差は認められなかったが、腹部 CT では副腎腫瘍は左側(直径1 cm)のみに確認された。また右上腹部に達する巨大子宮筋腫が認められた。6.11左副腎全摘出術施行したが、術後も P.A の病態は改善しなかった。7.6子宮筋腫(790 g)摘出術施行。術後の CT で右副腎腫瘍(直径1 cm)が発見され、7.30右副腎腫瘍核摘出術を施行し、ようやく P.A の病態は改善した。腫瘍は主に明細胞よりなる腺腫で、腺腫以外の副腎組織に micronodular hyperplasia 像がみられ、腺腫発生過程を知る上で興味深い。両側副腎腺腫による P.A は全腺腫例の0.6%で稀である。

9) 最近(1988年~)当院で経験した副腎腫瘍14例の検討

杉山 幹也・吉岡 光明 (新潟県立中央病院 内科)
村川 英三 (同 外科)
小山 高宣 (同 泌尿器科)
峰山 浩忠 (同 泌尿器科)

副腎腫瘍はこれまで比較的稀な疾患とされてきたが、近年の CT、超音波等の画像診断の進歩により偶発腫瘍の症例が増えてきた。当院では最近4年間に14例の副腎腫瘍を経験し、内分泌学的検索を行い外科的に摘出した。対象は男性6例、女性8例、年齢は31~72才(平均57才)であった。この14例中機能性腫瘍は6例、非機能性腫瘍は8例であった。また偶発腫瘍として発見されたものは9例で、そのうち機能性腫瘍を1例に認めた。9例の偶発腫瘍中4例は消化器癌の転移検索中、CTにて発見され、また偶発腫瘍は非偶発腫瘍に比し大きな腫瘍が多かつ